

[特別企画3]

メモカード活用によるインシデント防止の取り組み

三根久美子, 林田直美, 松元千佳子, 元日田勉, 北折健次郎

宮崎県赤十字血液センター

【はじめに】

採血業務において特記事項入力等, 他部門への引継ぎが必要な献血者が来所し, 採血部門の引継ぎ事項が発生した場合など手順確認のため採血マニュアルを取り出し読みながら作業していた。

項目によっては手順が複雑なものもあるため採血担当者の不安もあり手順を網羅しているか何度も確認し, 採血スタッフ2人でダブルチェックする項目もあり, その際, 献血者を待たせ採血業務が滞ることもあった。

今回, 関係部署に引き継ぐ内容や手順の把握を確実に行い, インシデント防止を図るために短時間で手順を確認できるメモカードを作成し活用したので報告する。

【方 法】

メモカードは, 採血課職員の意見を取り入れ, 4つの内容(1. 成分採血に関する項目 2. 過去に生じたインシデントに関する項目 3. 手順が煩雑な項目 4. 発生頻度が少ない項目)の中から14項目を選択し, マニュアルの内容を抜粋して作成した。

①ヨード過敏症②シャーガス③研究禁④HBIG
⑤HBs抗体高力価献血者の受入⑥分割20⑦シングル20⑧HLA適合(交差)⑨HLA登録⑩残血400(200)⑪問診該当⑫欧州等滞在歴(英国滞在歴)⑬コッヘルせずに抜針⑭ラベル貼り替えの14項目である。

工夫したことは, 文章ではなく実施する項目を端的に箇条書きに羅列し, 見やすく, 入力する部分がわかるように血液事業情報システムの画像や写真を付け加えた(図1)。

また, メモカードに採血番号のセグメントラベ

ルを貼付することで受渡時に確認できるようにした。実際の方法として採血前検査担当者または本採血担当者は該当する項目が発生したら, その内容が記載されたメモカードを使用し, 実施項目に斜線を引き, 必要に応じて次の担当者に引き継いだ。採血を完了する前にすべての項目に斜線があることを確認し, 採血後, メモカードは所定の場所に受渡便ごとに置いた。

受渡時, 受渡担当者は, メモカードの実施項目すべてに斜線がしてあるか, 項目別の枚数を確認する。「検体・原料受渡」画面での特記入力の種類, 本数の確認, 本体表示がされているかの確認を行い, 伝票出力する。不備があれば, 確認・訂正後に出し, 受渡を実施した。また, 採血スタッフへのメモカード使用状況のアンケートも行った。

【結 果】

2017年1月13日～5月31日までの期間に活用したメモカードの件数は, 移動採血車で26件, 献血ルームで872件であった。その中で最も多かったのが, PC分割:665件82%, 順にHLA登録:66件8%, HLA適合:22件3%, ヨード過敏症:20件2%とほぼ9割を成分献血に関する項目が占めた(図2)。血液事業情報システム以降, メモカード14項目の引継ぎ事項に関するインシデントは15件発生しているが, メモカード活用により, 2017年1月13日から5月31日までの期間および現在(10月31日)までのインシデントは0件であった(図3)。

採血スタッフに実施したアンケート結果からは, 「ダブルチェックしなくても確実に作業できる」「献血者をお待たせすることなく, 時間が短縮できた」「実施したら斜線で消してあるので何

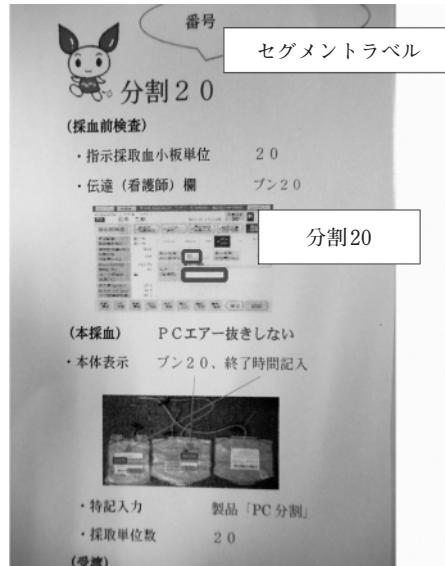


図1 メモカード

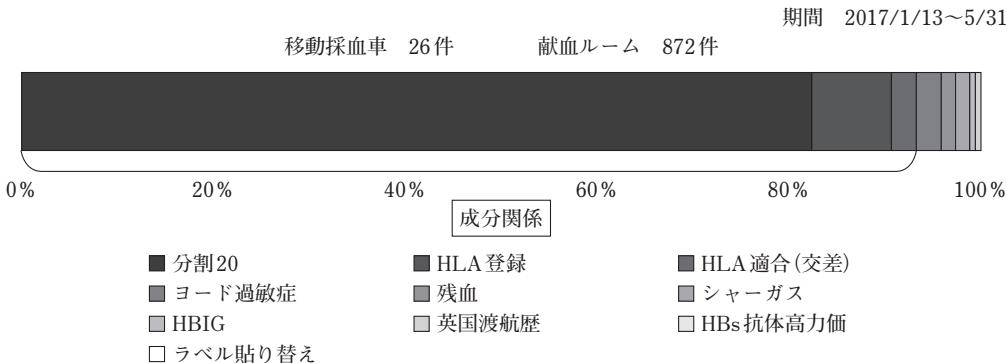


図2 メモカード使用状況

度も確認せずに安心できる」などの意見が多く聞かれた。

【考 察】

メモカードの作成と活用により、インシデントを防止し献血者を待たせることなく、採血業務を行えることができた。

とくにPC分割の項目に関しては、以前は過誤防止のためにタブレットの「認証」を押下する前に

特記入力、採取単位数、本体表示を採血スタッフ2人でダブルチェックしていた。別の作業をしているスタッフに声をかけることで、別のインシデントの発生要因となり、多忙のときのダブルチェックは負担となっていたが、メモカードを取り入れたことにより、確実に1人で特記入力等の確認業務が安心して行え、効率化に結び付く方法であったと考えられる。

メモカードについてもマニュアルや手順の変更

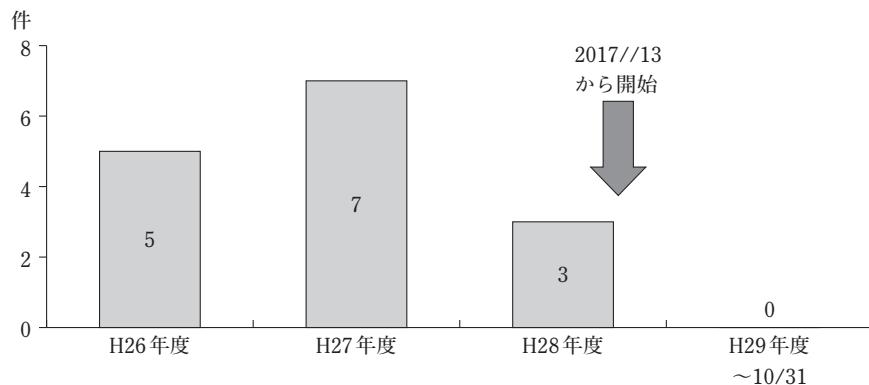


図3 14項目に関するインシデント

があった場合の見直し、また追加した方がよい項目などあれば、その都度作成し活用していきたい。
今後も献血者との対応を大切にしながら、イン

シデント防止に努め献血者と原料血液の安全確保に努めていきたいと思う。